
巻 頭 言

大阪国際工科専門職大学で紀要を発行することとなった。紀要は同じ専門分野の人たちが研究成果を発表する学会誌と違い、大学の一員が自由に表現したいことを述べる場であり、大学の内部は勿論、社会を構成しているさまざまな人に対して語りかけるものであり、いわば大学の顔であると言ってもよいだろう。多くの大学で紀要が発行されているが、それをみると大学で行われている研究だけでなく、大学の思想も語られているように思われる。

現在我が国には多くの大学があるが、それぞれ教育、研究の分野に特徴があり、それに従って特徴的な紀要が発行されている。それでは専門職大学という新しいカテゴリーの大学を作りつつある私たちの発行する紀要はどのようなものになるのか、既に投稿が決まっている著作の題名をみると、そこには専門職大学固有の内容があって、発行が期待される。

専門職大学とはなにか、これは開学準備ではもちろん、開学してからも日常的に考え、議論してきたと思う。私自身、長い間伝統的な大学というカテゴリーに身を置きながら、そこでの教育研究の将来を考えるなかで、多くの問題があるが大学と社会との関係について、特に社会と関係していくときの学問のあり方、そして教育の場がそれによってどのように変わっていくのかについてより深い検討が必要だと思い続けていたのだった。そのなかで、大学の学問は、理系も文系も、存在する対象の、それも限定された範囲での存在を分野として選び、その分析によって理解を深めることが主な関心であり、新しいものを作り出す「行動」については分析結果の応用として演習問題と位置付けられているに過ぎないことになっていた。しかし分析でいくら深い理解に到達しても、それだけで善きものを創出する事はできないので、善き社会を作るために必要な学問として、作るという行動の方法についての学問、デザイン学が必要であるという結論に達し、工学の分野にいた私は「デザイン学」を中心におく学問体系を考えていた。これらの思索を通して、「社会の中のデザイナー」という概念に到達した。そして現在、この言葉は我が大学では専門職大学を表現する一つの言葉として定着していると思う。

私たち人間は、常に考え、行動している。その内容は多様であるが、そのうちの多くは、社会に働きかける行動である。そして環境に何らかの影響を与える。環境は人類を取り巻く自然、生態系、人工物などであるが、それらにたいする影響は、社会を通じておこなわれると考えられるから、私たちの行動が社会に与える影響と考えてよいであろう。

「社会の中のデザイナー、Designer in Society」を言葉通りに読めば、社会に対し、デザインという行動で影響を与える人ということになる。そこで、ここに現れる「社会」と「デザイン」という言葉について、理解しておくことが必要である。

私たちは自分の周りに社会が存在していると考え。原理的に言えば、社会とはすべての人々であり、その多様な人々は自分と同じように環境の中にいてそれぞれの行動で環境に影響を与えている。この事は、現在の地質学に於ける時代が「人新生 anthropocene」であるという考えに示されている様に、人類の行動が、地球を地質学的に見るときこれまでとは違う新しい世紀になったと言われる事と関係するが、現在の地球環境の変化を見ればそのことが実感される。したがって、私たちは自分の社会の中での行動

が、環境に何らかの影響を及ぼすことを感じながら生きていると言ってよい。

しかしその影響をはっきりと描き出すことは私たち一般人にとってはできない事である。私たちがその影響を理解するのは、環境専門家たちの研究成果によって人類全体が、地球環境にどのような変化を与えるかと言う、巨視的な視点、それは研究成果、学説、などの公的知識として発表され、私たちに伝わるのであるが、それを私たち一人ひとりの行動原理にすることは難しい。

現実にはこれらの専門研究者たちの成果を基に環境学と言う知識をつくり、これに基づき環境の危険な状況を克服するために国連が世界に宣言し、また各国の協力の仕組みを作り、そしてそれに基づき各国が政策を決め、各国の産業、そして個人が行動するという形が定着してきたといえるであろう。現在この枠組みは、あらゆる分野の行動、すなわちデザインに関係するものと考えられていて、その意味では大きな成功を達成したと言うことが出来るのであるが、現在の世界の状況をみれば、人類が抱えている問題全てが解決されるとはとても言えない状況にある。現在の悲惨な戦争、感染症の過酷な影響、SDGsで示された17の困難などは、すべて排除したいものであるが、その見通しは立っていない。これはなぜか。

私は自らを振り返って、一つのことに気づかされている。それは学問を研究する立場で何が問題かをいつも考えていた中で、問題を対象として考えていた事である。ここで述べてきた社会の課題を考える時、いつも社会を外に存在する対象として考えてきたと言うことである。

自分が社会の中の一員であることを忘れ、社会は自分を取り巻く環境だと考えている。従って外から見ながら善き社会を作る方法を考えていたと言えるであろう。実はこの考え方は、科学研究においてどんな対象についても正しいことが一般に認められているものである。しかし、社会を対象として考え研究する、そして善き社会を求めて行動する場合、これとは違う視点がある。それは自分が社会の一員であるという認識に立つ視点である。ここでその視点を、「社会を内側から見る視点」と呼んでおこう。

社会を内側から見るとどのような風景が見えるのであろうか。大阪国際工科専門職大学に身を置くとして考えれば、まず家族や友人、職場の同僚がいて、大学を運営する人々がいる。そしてここで学ぶ学生がいる。本学の特徴として、地域の産業との協力があり、いろいろな経験を持つ人々出会う。また本学に入学したい人々も見える。本学を卒業する学生は、社会にでて教員と同じ風景がみえる身近な人々である。

社会の内側に立って見ると、自分を中心として実際に対話する身近な人々にはじまり、その人たちの先にはまだ会ったことは無いが、いろいろな構造を作ってじぶんとの関係を考えることのできる社会の人たちが広がっている。そのなかには、遙か遠いところに総理大臣もいるであろう。

この様な社会を内側から見る視点を持っている人は、自分の行動が社会にどのような影響を与えるのかを感覚的に捉えることができると考えて良い。外から見る人は、社会に課題がある時、その課題を分析し、科学的に記述し、専門が必ずしも同じでない第三者である行動者に渡す。そしてそれを渡された人は、あらためて分析結果に基づいて自らの行動をデザインすることになる。これは現在の行動者が行動するために従わなければならない過程であるが、その過程はデザイン学で考えると複雑で難しい過程なのであり、正解としてのデザインにはなかなか到達出来ない。

これを解決するのが、「社会の中のデザイナー」という専門職なのである。専門職は、上述した様な社会が抱える多様な課題を実感している人たちであり、それを技術による行動で解決しようという動機

を持っている。それは本学で言えば人工知能、ロボットなどの情報技術、またアニメーション、ゲームなどの情報芸術を身につけた人達であるが、その技術の単なる知識だけでなく、これらが社会においてどのような役割を果たすかを熟知しているデザイナーである。

このような専門職が育って行く場所が専門職大学である。そこでは、常に社会が何を求め、何に悩んでいるか感受しながら、その解決法をデザインする力を身に付け、それを大学の中で、あるいはより広い一人一人の専門職が描く社会のなかで、実際に行動する、これが社会の中で他にない使命を持った専門職大学である。わたしたちは新しい考え方を構築しながら進んで行くが、多くの専門分野に関係する他の専門職大学も、本質として同じ基底を持っている事を考えながら、専門職大学の間で交流することも考えて行きたい。

学長 吉川弘之

